

肖不揣擣味、爰謹加之點勘、甘諸梨棗、併書其所嘗聞、以置後云爾、

安政戊午〇五年二月

不肖男 直溫謹跋

〔梅里餘稿〕牛痘辨惑小言

有一醫種牛痘于某兒者、偶兒已感染天行痘、是以兩痘併發、兒遂不起、以致其父母之怨懟焉、因謂天行痘大抵以時流行、方其流行、且無施牛痘可也、可以免招若般之怨恨、予謂不然、天行痘之與牛痘、其險易順逆、固判然異症、其併發者亦不危於單發天行痘、則方天行痘流行之時、當須務多行種法、庶幾全兒命於未危、若遇其併發者、以致招怨懟、罪固不在乎我、而由怨者不知耳、有比隣失火、主人不在、欲往救、又恐救之不得、而後來却招救助不盡力之毀、將待其火自滅而往救、而火不自滅時、束手傍看其焚燬可乎、

〔春波樓筆記〕吾日本、開闢近し、故に人慮の薄き事、此の一事を以て知るべし、醫宗金鑑及西洋の書中に載する處、種痘の法あり、此の法を用ふる時は、死する事なく、面部に痕なく、難症なし、流行に傳染する時は、毒多き者は死す、然りと雖も生得、重毒ある者あり、必二たびす、種痘を以て其毒を減す、減せざれば流行に感じて必死症なり、又虛薄の生あり、痘をう、べからず、余○司馬江漢が親族小兒あり、此の法を傳ふるに、更にうけがはず、如何と云ふに、病を求むるに近し、一時其の難をのがれん事を、愚と云ふべし、意に種う、即輕し、

〔除痘約論〕小引

吾此邦域ニ於テ、痘ノ尙多ク行ハル、コトヲ知ル、痘痕アル人民ノ夥シキニ因テ確然タリ、且今日ニ至リテモ、此輕易ナラザル病傳染病、即チ痘エミナ指ス、ノ長崎ニ行ハレテ、幾多ノ生靈ヲ殉ゼシムルヲ目撃ス、嗚呼哀哉、此ノ病ノ未ダ根ヲ斷タザル所以ハ他ナシ、之ヲ防制スベキ種痘ノ法アリト雖モ、尙舊ニ依テ、狐疑ヲナシ、無根ノ怖畏ヲ懷キ、之ヲ行ハザル者ノ多キニ因ル、此ノ怖